
死神を信じるな

聖司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神を信じるな

【Zコード】

N1018A

【作者名】

聖司

【あらすじ】

事故で死んだ青年の死後の世界の物語。彼を水先案内する白い髪の少女は一体何ものなのかな？

一人の青年が今日、死んだ。

人が死ぬ事はそれほど珍しいことではない。

事故、自殺、殺人、戦争、飢餓、病、人が死ぬ理由などいくらでもある。

その青年も今日、事故で死んだ。青年は自身の死体を幽体となつて見下ろしていた。

「……死んだのはよくわかつた。現に自分の死体、見下ろしてゐる訳だしね」

自分の顎に手を当てていかにも今考え中のポーズをとる。雨が降つていてるが零は全て彼を無視して身体をすり抜けている。

彼は今、自身の死んだ事故現場の上空を浮遊している。別にそこに自縛しているつもりはない。如何したらいいか解らないだけである。

「……死神でも来るのかな？」

そう口にした瞬間、背後から急に声がした。

「死神は敵だ」

うお！つと情けない声をあげて青年は振り向いた。後ろに立つていた、というより浮いていたのは白い髪の少女だった。

「死神は敵だ。あれの言葉を信じると転生は愚か消滅させられるぞ」

少女はただこちらを見つめ、言葉を続ける。青年自身はまったく話を聞けていない。

「……君、誰？　君も死んでるのか？」

少女は問い合わせようともしない。そしてまた話始めた。

「死神の言葉を信じるな。死神は言葉巧みにお前らファンタムを本當の死へと誘う」

青年は訝しげに白い髪の少女を見つめている。

背丈からするに十歳前後のように見えるが、少女の言葉遣いから

が、自分より年上のような気がする。腰まで垂れた長い白髪が神秘的な何かを連想させた。

合いも変わらず少女は話を進める。

「貴様はどうなりたい？ 消滅か？ 転生か？ それともこの世界に留まるか？」

「……普通ならみんなどうするんだ？」

青年は田の前にいる少女を怪しいと思いながらもなぜか質問を返した。

「普通なら転生……でもほとんどが死神に食われる」

食われるという表現に色々な想像を膨らませて青年は少し身震いした。自分も食われるのだろうか？ 食われるという単語から青年の連想した死神像は大きな化け物だった。

死んで尚そんな化け物に食われなきやいけないのは余りにもイヤだ。ならば普通に新しい人生を送りたい。

青年が妄想で恐怖心を膨らませていると、自分の袖を引っ張られてるのに気が付いた。少女の小さな手が青年の袖を掴んでいた。

「死神が来た。ここから移動する」

「え？ あ！ ちょっと うあ！」

身体が急に投げ飛ばされるような感覚に見舞われた。不と辺りを見渡すと風景が高速で通りすぎて行つた。青年は少女に凄い速さで引っ張られているのに初めて気づいた。

バイクぐらいの速さは出ている。青年はそう感じたが、何か他の違和感を感じた。しかし、その思考を遮るように少女の声が聞こえた。

「後ろを見てみる。死神が追つてくる」

少女の言葉に従い後ろを見てみる。背後からは羽根をつけた人間が追つてきていた。

「……天使？」

見たままの感想を述べた後、すぐに否定の言葉が帰ってきた。

「あれが死神だ。死んだばかりの人間は天使だと言つてあれをすぐ

に信用する。そして食われていくのだ

「……なるほど」

少女の言葉に納得してそのまま少女の後頭部を見た。少女の長い髪は少しも揺れず、自分の髪も服も風に揺れている気配もない、風すらも自身を無視していた。

「……死ぬ、つて嫌だな」

気づいた途端にずっとエレベーターに乗っているような、気持ち悪い感覚を感じた。

「死んでもまた生き返ればいい、転生はお前が一からやり直せるようにお前の命を還元するのだ。お前の意識、知識、記憶、すべてを0に戻す、天国に行つた後、ガフの門を通れば魂は勝手に還元される。後はガフの部屋で自分の出生を待てばいい」

「はあ？……つまり天国に行けば勝手に転生できるんだろ？」

言われた意味を半分も理解せずに青年は諦めた。

後ろを見ると先程までいた死神？ はすでに遠くに見えていた。「前を見ろ、あそこを超えるべし天国に行くのは簡単だ」

少女が開いた手で前を指差した。指の先には薄い、虹色のベールのようなものが見えた。

「オーロラ？ うわ！ さつすが天国！ キレイだな」

天国という響きにさつきまでの不安を消してはしゃぐ青年を見て

少女は初めて笑みを浮かべた。

虹色のベールが目の前まで迫ると後ろには死神はいなかつた。青年が少女を見るとすでに少女はベールに手を潜らせていた。
「早く来い、私は腹が減つているのだ」

「ああ、わかつた」

少女は完全にベールを潜り、ベールの向こう側にいた。青年も慌ててベールを指先で触れた。

ベールは何の感覚もなく指先を受け入れた。

「……あれ？　口口は？」

ベルの先にあつたのは今までの雑居ビル群とは違ひ荒野だつた。土は紅く、目に入るのは燃えたかのように枯れた木々だつた。

「それでは頂きます」

青年の背後から不穏な声が聞こえ、後ろを振り向いたがそこには誰もいなかつた。

「おい、どこにいったんだ？　口口まで来て置いてくつて事はないよな？　おい！」

急に消えた少女を探すように大声で叫んだが無常にも何一つ反応は帰つてこなかつた。

「マジでいなくなつちまつた。それにさつきの声なんだ？」

警戒するよう辺りを見渡すが何一つ見つけることはできなかつた。急に一人になつた事からか青年は大分動搖していた。そのせいで自分の身に起つた異変に気付くのが遅れた。

「痛！」

急に痛みを感じた右手を見ると、青年の右手は燃え上がつていた。だんだん火は大きくなり固形燃料を燃やすように体を燃やしていくつた。

「おつおい！　コレが転生か？　馬鹿やろうー。こんな痛みの聞いてないぞ！　おい！　うつうわああああああ……」

紅い崖の頂に白い髪の少女がいた。少女は左手を軽く上げ、無表情のまま何かを唱えた。

すると崖の下のほうから大きな火の塊が音もなく少女のほうに浮かび上がつてきた。

「おいしそう」

少女が口を開くと火は流れるように少女の口に滑り込んでいった。喉を鳴らして飲み込む様は何とも美味しそうだつた。

火がすべて少女に飲み込まれると一言だけ、少女は言つた。

『うなぎの寝床』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018a/>

死神を信じるな

2010年10月11日04時34分発行